

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第50巻第2号 2014年11月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.50 No.2 November 2014

《論 説》

古文における感情形容詞・感情動詞の一考察 －「楽し」・「楽しむ」を中心に－

賀 耀 明

The Research of Emotional Adjectives and Verbs in Japanese Ancient Style Prose
－ a case study of “楽し”・“楽しむ”－

Yaoming He

1. はじめに

感覚や感情を表す言葉は、人間の姿を映し出し、興味深いものである。感情は心の問題であり、心の動きを説明することは、東洋においても西洋においても難しい問題とされてきたのである。

日本には、それらの研究書や研究論文もかなり多い。心理学では形として外に現れる表情や行動の側面から感情の研究を進めようという試みがある。他方で、感情を表す言葉との関わりで感情を分析する研究も進められている。

日本語における感情語彙についての研究の中で、総合的な語彙研究と一語ずつ史的・記述的な研究が見られる。しかし、日本語研究の分野で未開拓の部分が少なくないように思われる。情意表現に関する包括的・体系的

研究、または表現形式、構文機能の分析はまだ十分には行われていないと言ってよい。また、諸研究の中では、悲観的な不快な感情語彙の研究が多く、「楽しい・楽しむ」をはじめ、快い感情語の研究はあまり多く見られない。というのは、いずれにしても感情を表す言葉の研究にはなお検討すべきところが多いというわけである。本文では古文における「楽し・楽しむ(む)」を中心に感情語彙を自分なりに検討したいと思う。

本論文の目的は、感情表現における形容詞と動詞の意味・用法の違いを究明するところにある。また、日本人の感情に基づいて言葉は生まれるわけであるが、そのようにして成立した言葉が逆に日本人の心を反映しているのではないかと考えることも必要である。一方では、日本人の感情が時代的に社会的にどのように変わってきたかを考えるとともに、他方では感情語彙がどのように時代とともに変わってきたかを考えることも必要である。その点では感情に関わる語彙や表現をなるべく理論的にまたは実証的に整理していくことが必要であろう。

本論文では、おおよそ次のような研究方法を取る。まず、感情語彙の範囲を明確にし、次に感情形容詞と感情動詞との密接な関係及び共通する傾向について述べる。それから、「楽し・楽しむ(む)」を中心に文学作品の用例を通して、それぞれの意味と用法を通時的に検討してみる。研究の対象は、古典語に含めるものを資料とする。

2. 情意表現

人間の感情、感覚、意志、希望などを語る時、心情、感じ、態度、情緒、気持ちなど、数多くの関連した表現があるが、言語表現との関係では、「情意」という用語が多く使用されている。情意とは、話し手が事柄に対する発話態度または聞き手に対する主観的な働きかけなど、一般的に表現される情意的態度を意味すると考える。ここで話し手が事柄について発話を通じて主観的に表現したり、感じたりするという心的行為を解明することを目的とする言語表現を「情意表現」と定義する。本論文で扱った情意表現

とは、人間の心的行為としての感情を表すものを指している。そして、事柄・事態は人間の情意を生じさせる条件として必須なものとなる。

2.1 情意主体

情意表現においては、一般に情意の表現者を主体とする。ここで言われる感じ手、あるいは情意主を「情意主体」と呼ぶ。話し手が聞き手に向けて情報を伝達すると同時に、発話態度を理解することは言語の表現行為を分析する焦点となる。話し手の発話態度が言語表現に伴って表されるとき、それを情意表現として考察する。さらに具体的に言えば、情意表現には、「うれしい」、「楽しい」、「怒る」という情意を表す語彙がある。しかし、本考察はこのような感情語彙のみならず、情意主体の動きという「情意的態度」が表現された文についての分析にも及ぶ。人間の情意と言語表現との関係は、会話文、心話文、地の文などの形式がある。どんな場面で情意を起こすか、誰に対して伝達するか、何に対して情意を起こすかは情意表現の研究には欠かせないものと思われる。

本論文では、文において主語だけでなく、主体という用語も使用する。情意表現では、普通、話し手は情意主体として主語に位置する。ただし、文によって話し手は必ずしも文の主語になるとは限らない。つまり、主体は文法上での主語の概念ではなく、主語は文の構造に関わる成分である。もちろん、文によって話し手と主語に位置する主体とが一致する場合もあれば、一致しない場合もある。そこで、話し手と聞き手及び第三者との言語環境を設定する。また話し手以外は他者という呼び方を使用し、さらに一人称、二人称、三人称という用語を使用する場合もある。

以上、情意表現の基本的な認識について論じた。

2.2 情意表現の先行研究

日本には、感情についての研究書や研究論文もかなり多い。

文学研究としては、「あわれ」、「をかし」、「わび」、「さび」などあるジャ

ンル、ある文学作品のキーワードとなっている感情語の研究もかなり多い。九鬼周造（1975）は日本人の感情の構造を分析し、快——不快、緊張——弛緩、興奮——沈静の三つの軸を中心に整理し「情緒の系図」を作り、それぞれの感情に対応する短歌を挙げている。日本人は、こまやかな情緒や感情の持ち主であるが、それを外に表出する点では乏しく、露骨に感情を言葉や行動に出すことをはばかる傾向があると言われている。また、楽しい、快い感情よりも、悲観的な不快な感情を表す語のほうが、古典作品や現代の語彙においても優勢を占めているようである。

ところで、感情を表す言葉には形容詞が多い。それについての研究は、例えば、山本俊英（1955）はク活用形容詞が状態の意味を表し、シク活用形容詞が情意的意味を表すものと指摘した。そのほか、古典語については、数多くの論文がある。これら古典語関係の著書・論文では、感情を表す語のうち、特色のある語が取り上げられ、その意味・用法が検討されている。吉田光浩（1994）の『感情形容詞構文小考——「うれし」について』はその一つである。

また、感情語の多くの所属する形容詞の現代語における用法を一語ずつ記述的に明らかにしたのものとしては西尾寅弥（1972）の「形容詞の意味・用法の記述的研究」が挙げられる。寺村秀夫（1982）は、感情表現の主観性と人称制限に着目しながら、動的事象の客観的な描写と、事物の性状規定の中間に感情表現を位置づけている。

さらに、語彙史的研究においては、歴史的な観点から、語の消長を論じたものもある。阪倉篤義（1978）「日本語の語源」、宮地敦子（1979）「身心語彙の史的的研究」などが評価されている。これらの研究では、感情を表す語のうち、興味深い語が選ばれ、その史的推移が研究されている。

ここまでの諸論は個別語についての研究である。それに対して、全体の総合的な語彙の歴史の研究には、山口仲美（1982）の「感覚・感情語彙の歴史」、また感情語の全体にかかわる前田富祺（1993）の「日本語の感情を表すことば」、許羅莎（2005）の「現代日語感情詞研究」などが挙げら

れる。

先行研究から見ると、日本語における感情語彙についての研究の中で、総合的な語彙研究と一語ずつ史的、記述的な研究が見られる。それらはお互いに補う必要があると思う。これまで、一般的に感情語彙を考える場合には、形容詞を中心に考えられてきた。しかし、筆者の知る限りでは、形容詞と動詞とで語構成の面で関わりのあるものも少なくない。例えば、「悲しい」・「悲しむ」、「楽しい」・「楽しむ」などがそれである。情動を表すのにふさわしいものは動詞であり、心の状態を表すのに適当なものは形容詞であろう。その点では、感情語彙としては動詞からまず考えるべきではないかと思われる。少なくとも動詞と形容詞との関わりの中で考えるべきであると思われる。また、諸研究の中では、悲観的な不快な感情語彙の研究が多く、「楽しい・楽しむ」をはじめ、快い感情語の研究はあまり多く見られない。というのは、いずれにしても感情を表すことばの研究にはなお検討すべきところが多いということである。本文では上代から中世までの古典作品における「楽しむ・楽しむ(む)」を中心に感情語彙を自分なりに検討したいと思う。

本論文は、日本語学を深く研究するため、感情表現の分析・考察を通して日本語語彙研究への試みを提供することが重要な狙いである。さらに、日本語の理解・認識について日本語教育へ新しい視点を提供することができると考える。この意味で、感情語彙「楽しむ・楽しむ(む)」を分析・記述の形で取り上げて考察することの意義は大きいと考えられる。

3. 感情の意味規定とその表現

日本語には「うれしい、楽しむ、眠い、疲れる」というような感情・感覚を表す語がある。感情・感覚表現は一般に話し手自身の感情・感覚を表すのが原則だが、述語用言の形態、状態性及び文末に現れた説明・判断のモダリティによって、他者の気持ちを表すこともできる。そして感情・感覚の主観性から客観性へと転換する。これまで感情・感覚形容詞の研究は

多く見られるが、感情・感覚といった語彙の意味、体系的分類、語彙転用及び感情・感覚動詞については、あまり詳細に論及されていないようである。そこで、本章において、西尾（1972）、寺村（1982）二氏の研究に基づいて、感情・感覚を表す述語文を感情・感覚表現と呼び、感情・感覚の「感じ手」を感情・感覚主体と呼ぶことにする。

先行研究を踏まえて感情の意味規定、感情用言の認定、分類、範疇を再検討し、感情の意味的特性を中心に人間の認識意識の面から「情意」の生成過程を分析する。また感情の主観性と客観性によって、感情主体と述語用言との関わりをめぐって、実例を通じて感情形容詞「楽しい」・感情動詞「楽しむ（む）」を中心に日本語の感情諸相と特徴を考察したい。

3.1 感情の意味規定

感情の意味をどのように規定し、その内容をどのように成立するかという問題について、感情表現の研究を進める前に明らかにしておく必要がある。したがって、感情表現を認定する前に、「感情」という意味規定を明確にしなければならない。

まず、辞書の説明を調べてみると、新村編（2008）の『広辞苑第六版』には「喜怒哀楽や好悪など、物事に感じて起こる気持ち」、北原編（2001）『日本国語大辞典第二版3巻』には、「物事に感じて起こる心持。気分。喜怒哀楽などの気持ち。特に心理学では、意識の主観的側面、感覚や観念に伴って起こる快、不快や情緒、情操の状態をいう」とある。

要するに、感情は心の動きであり、非常に難しい問題であると考えられる。さらに言えば、感覚も心の動きであり、心理学では感覚も感情の中に入れて考える場合もある。しかし、本論文においては考察の便宜のために感情と感覚とを別々に扱うことにする。

感情は、今現在の自分の心の中の体験であり、現実生きて働いている生の体験でもある。つまり、事柄や事態に対する発話当時の情意である。

感情は人間にとって誰もが否めなく毎日体験していることでありながら、いざ改めて取り上げようとするとき把握しにくい。

感覚は、その時の感じの体験であり、発話当時の感覚である。目、耳、鼻、舌、皮膚といった五官による感覚は一般に五感という。すなわち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚である。五感は、自分を取り巻く内的・外的な様子を五官によって感じ取るのである。感覚は、主として生理的、行動的条件に限定して用いられることが多い。

本文では上代から中世までの古典作品における「楽し・楽しむ（む）」を中心に感情語彙を自分なりに検討したいと思う。感覚についてはこれからの課題として研究していきたい。

3.2 感情用言とその分類

先言ったように、日本語には心理的、生理的、精神的な情意といった心的態度にかかわる語彙がある。ところが、このような人間の情意を表す用言の認定について研究者によって捉え方が必ずしも一致するとは言えない。特に日本語の情意を表す語彙の分類、範疇及び語彙的転用については、これまでの研究は十分には論及していないと言ってよい。ここでは、先行研究を踏まえながら情意用言の認定、範疇、分類及び語彙的転用を再検討し、形容詞と動詞を中心に情意を表す用言の語彙の様相を明らかにしたい。

3.2.1 情意形容詞

日本語の形容詞には、客観的な属性・状態を表すものと、主観的な感情・感覚を表すものがある。これは意味的な相違だけでなく、構文的にも異なる特色がある。現代形容詞の形態からすれば、基本形において、「～い」形と「～だ」形との二種ある。従来の形容詞の分類には、主として主観性形容詞と客観性形容詞、感情形容詞と属性形容詞、状態形容詞と質形容詞といった二分類がある。また、感情形容詞と属性形容詞の中間的範疇――

評価形容詞という三分類も見られる。

形容詞を分類する前に、まず「状態」と「属性」の概念及び両者の関わりを明らかにしておく必要がある。状態と属性については、仁田（2001）は次のように述べている。¹

「状態」とは、限定を受けた一時的な時間帯の中に出現・存在する、物の、展開していない——言い換えれば、その時間帯は続く——同質的な一様なありよう・ありさまである、と概略特徴づけることができよう。

「属性」とは、時間的限定を持っていない、したがって恒常的に物に存在する、物の同質的なありよう・ありさまである、と概略特徴づけることができよう。

要するに、状態はあるものに一時的に存在するありさまであり、属性はあるものに恒常的に存在するありさまである。すなわち客観的な現象を表す状態と属性は限定された時間帯で言い表し方をする時に両者は同質的で一様なありさまを呈している、いわゆる静的事態である。両者は静的な現象を表す点では共通している。さらに自然の状態と人為的状态の二種を認めなければならない。

しかし、状態は永遠に不変なものではなく、外部から作用、影響を受けて一時的な時間帯の中に変化させる。それに対して、属性は内的性質がなかなか変わりにくく、自然的、固有のものとして恒常的に存在している。これは物の属性と状態の区別であろう。また、特定の文脈で主観から客観への転換、あるいは客観から主観への転換が可能になる。言い換えれば、感情・感覚から属性・状態への転換、あるいは属性から感情・感覚への転換も可能である。

したがって、本来の情意形容詞は特殊な原因で限定された一時的な時間帯にその性質を変化させる場合、つまり情意から状態へと転換する時、その場合で状態形容詞として認められ、情意形容詞が長時間で恒常の現象と

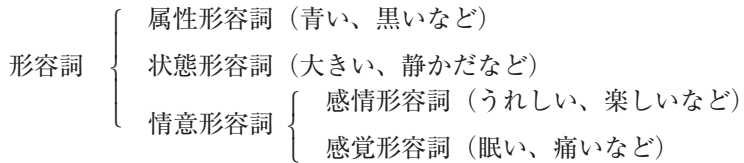
1 仁田義雄（2001）「命題の意味的類型についての覚書」『日本語文法』P16。

して現れる場合、つまり情意から属性へと転換する時、その場で属性形容詞として認められる。さらに本来の属性形容詞であるが、特定の条件で瞬間的また一時的に情意を発生させるという人間の五感を表す形容詞及び温度を表す形容詞をその場で情意形容詞として扱うことができる。

- ① ペットのポチが死んでしまってひどく寂しい。 (主観・感情)
- ② タバコがなくなって、口が寂しい。 (主観・感覚)
- ③ あの通りはいつも寂しい。 (客観・属性)

のように、①、②は、話し手は命題内容について直接心の中から自分の気持ちを表し、主観的な表現であり、述語用言「寂しい」は話し手の感情・感覚を表す語である。それに対して、③では、話し手は客観的に命題内容を述べて、「寂しい」は事態の属性を表す語である。

ここで先行研究を踏まえた上で日本語の形容詞について、次のように分類する。



3.2.2 情意動詞

日本語の動詞は主として事物、物的、心的事象の動作、作用または変化、存在を表す語である。日本語文法には古い時代から自動詞と他動詞との区別があるが、現代日本語研究では動詞の分類について、アスペクトの観点から、金田一 (1950) は動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」に区分し、鈴木 (1957) には「動作性動詞」、「状態性動詞」という分類があり、また金子 (1995) では「状態性用言」という用語も見られる。その他、鈴木 (1972) では動詞を「意志動詞」と「無意志動詞」に分類している。さらに、工藤 (1995) はアスペクト対立の有無の観点から動詞を「外的動詞」、「内的情態動詞」、「静態動詞」にするという分類を

主としている。しかし、動詞の分類においてテンス・アスペクトなど、意味論と構文論に関係のある多くの範疇にわたって、未解決の問題も少なくない。

人間の感情・感覚、意志、希望など、いわゆる人間の内的な気持ちを表す動詞があり、ここでこのような心理的、生理的、精神的に関わる語を総括して情意動詞と呼ぶことにする。しかし、情意動詞という呼び方は先行研究において必ずしも定着したものではなく、「心理動詞」、「内的情態動詞」、「態度動詞」、「感情動詞」という思考を表す動詞を中心に論じていると言っても過言ではない。ここで、形容詞における情意形容詞の対立を、動詞の中でもパラレルに観察するため、この情意動詞の呼称を用いる。

ここでは、まず、金田一（1950）、鈴木（1957, 1972）、工藤（1995）などの研究を基にし、意味と構文上及び形態上から日本語の動詞を次のように大きく三分類する。

動詞	{	動作動詞（書く、働く、走るなど）
		状態動詞（ある、いるなど）
		情意動詞（喜ぶ、疲れるなど）

この分類の中で動作動詞は工藤（1995）の外的運動動詞に、状態動詞は工藤（1995）の静態動詞に、情意動詞は鈴木（1972）の意志動詞と無意志動詞の一部及び工藤（1995）の内的情態動詞にそれぞれ相当すると考える。

情意動詞の範疇、分類をどのように規定するか、情意表現の研究を進める前に明らかにしておく必要がある。ここで先行研究を踏まえた上で、情意を表す動詞は次のように示す。

情意動詞	{	感情動詞（喜ぶ、楽しむ、苦しむ、困るなど）
		感覚動詞 { 五感動詞（見える、聞こえる、味がするなど）
		{ 知覚動詞（音・声がする、感じがするなど）
		希望・願望動詞（望む、願う、祈るなど）
		意志動詞（する、いくなど）
		思考動詞（思う、考える、信じるなど）

以上述べたように、日本語の情意を表す用言の語彙には形容詞と動詞がある。形容詞には感情・感覚を表す語彙があり、動詞には感情・感覚、希望・願望、意志、思考を表す語彙がある。

4. 「楽し」と「楽しむ(む)」の考察

前では、品詞論で日本語の感情語彙を形容詞と動詞に分けて説明した。情意形容詞には感情・感覚を表す語彙があり、動詞には感情・感覚、希望・願望、意志、思考を表す語彙があると分かった。次は感情形容詞「楽しい」と感情動詞「楽しむ」を中心に感情語彙、感情表現の全貌を覗きたい。

悲しみや喜びなどの感情を表現する場合には、感情形容詞と感情動詞を使う場合がある。

A 悲しい 楽しい 恐ろしい 悔しい……

B 悲しむ 楽しむ 恐れる 悔いる……

Aは感情主体の感じているものそのままを表明する場合に用いられ、Bは第三者の感情を客観的に描く場合に使われるものである。また、感情の対象を表す補語は、形容詞表現では「～ガ～」となり、動詞表現では「～ヲ～」となる。これらの文法的原則は、現代語の観察から見出されたものであるが、古代語についてもおおむね適合すると言っていいたいだろう。

語とは何かという問題は、言語研究においては、古くて新しい問題である。言語学の概説や事典では、必ず何らかの形で語とは何かが説明されている。ここで仮に「文を構成する要素で、一定の形を持ち、一定の意味を表す最小の言語形式を語と呼ぶ」ということにしておこう。

語には形式(形態)と意味、および機能が備わっている。次に形態・意味・用法という三つの面から古文における「楽し」と「楽しむ(む)」について考察しようと思う。

調査対象文献は次に挙げた通りである。

上代の文献：万葉集・古事記・日本書紀

中古の文献：新撰字鏡・倭名類聚抄・類聚名義抄・古今集・後撰集・

拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集・
竹取物語・土佐日記・大和物語・伊勢物語・平中物語・
蜻蛉物語・宇津保物語・落窪物語・枕草子・源氏物語
中世の文献：今昔物語集・徒然草・方丈記・平家物語

4.1 形態上の考察

語は形態と意味とが結びついたものと考えられるので、語の研究においてはまず語形変化の問題と語義変化の問題を考えることが重要である。語の成立は語源や語構成を考えることも必要である。こうして、語を多面的に考え、関わりのある他の語との対照をしながら合わせて考えるべきである。「楽し」と「楽しむ(む)」の語源の問題は後の意味のところに譲ることとするが、まず語構成の面から考えてみよう。

4.1.1 「楽し」の語幹部

語構造の記述に際して、まず、その前提となる語を構成する部分要素、すなわち語構成要素の認め方と分類を明らかにする必要がある。野村雅昭氏(1977)は語(単語)を構成する要素について次のように定義している。

語基：語の意味的な中核となるもので、単独で、語を構成することもできる。

接辞：語基と結合して、形式的な意味を添えたり、語の品詞性(文法的意味)を規定したりする。単独では語を構成することができない。

上に示したように、語構成要素は「語基」と「接辞」に大別することができる。また、「接辞」は、「語基」の前に付く「接頭辞」と後ろに付く「接尾辞」の二つに分けられ、「語基」に対する位置によって、「接頭辞」と「接尾辞」とが区別される。

現代形容詞の形態からすれば、基本形において、「～い」形と「～だ」形との二種ある。現代語の「楽しい」に対応する動詞としては「楽しむ」

がある。このように、「～む」形が動詞となり、「～い」形が形容詞となるものが挙げられる。例えば、

憎い——憎む、すごい——すごむ、惜しい——惜しむ、懐かしい——懐かしむ、親しい——親しむ、悲しい——悲しむ、怪しい——怪しむ、いやしい——いやしむ、苦しい——苦しむ、痛い——痛む、悔しい——悔やむ、はかない——はかなむ、明るい——明るむ、ぬるい——ぬるむ、ゆるい——ゆるむ

以上の16対がそれである。これを見ると、形容詞にはいわゆる感情形容詞が多く、それに対応するものとして感情動詞がある。本文で取り上げる「楽し」「楽しぶ（む）」には同じ語基「楽」がある。

しかし、語幹と語基は違う概念だと思われる。

「形容詞が体言的な語幹部と、文法的な機能に応じて変化する語尾とに分析しえることは、これまでもしばしば指摘されたところである。したがって形容詞の形成という問題を考える場合には、語幹部がどのように構成されたかという点と、語尾部がいかにして発達したかという点に分けて考察するのが、分かりやすくもあり、また必要でもあろうと思う。」²と書かれているように、ここでは、まず、「楽し」の語幹部について、整理してみたい。

形容詞についての最大の問題の一つは、形容詞にはなぜク活用・シク活用という二類の別があるのかという点である。この問題については、山本俊英氏（1956）によれば、形容詞をク活用・シク活用とにわけて、その意味を検討すると、前者には状態的意義を持つ形容詞が多く、後者には情意的な意義を持つ形容詞が多いという。このことから見て、シク活用の形容詞に存するシは、情意的要素と考えられるのではないかと書いている。

「楽し」はまさに情意性を表すシク活用形容詞であるのはいうまでもない。シク活用の形容詞では、シまでを含んだ部分を語幹と見るべきである

2 山口佳紀（1985）『古代日本語文法の成立』有精堂。

ことは、これまで指摘されたとおりであるから、ここでもそれに従う。だから、古典語「楽し」の語幹部は「楽し」そのものである。さらに言えば、シク活用の形容詞の語幹の用法で用いられる形態は、すなわち「語基+シ」（以下「語基シ」と呼ぶ）と同じである。

言うまでもないが、ク活用とシク活用との決定的な差は、終止形の形態にある。すなわち、ク活用の終止形は、語幹にシ語尾の接した形であるのに対して、シク活用の終止形は、その語幹と同じ形態を取っているのである。

ク活用形容詞は語基が意義を担い、それに活用語尾ク・キが接することで形容詞として成立する。一方シク活用形容詞は語基シが意味を担うが、同時に語基シが終止形と同形であり、語基シという形態になった段階で形容詞として成立したと考えることも可能である。ここでシク活用形容詞に限定して考えると、ブ・ムは語基シに接することから形容詞から動詞への派生という方向性が想定でき、形容詞を動詞化させる接尾辞と考えられる。

4.1.2 「楽し」から派生した「楽しむ（む）」

前節では、シク活用形容詞の動詞用法では、ブ・ムは形容詞から動詞を派生させる性格を持っていることがわかるようになった。では、「楽し」の派生動詞はいかにして成立したのかを考えてみよう。

現代語では感情動詞「楽しむ」が使われているが、その古語の場合は「楽しむ・楽しむ」が見られる。「楽しむ」と「楽しむ」とを比較した場合に、語形が変化したものであることが明らかである。同じ資料の中にも両方が出てくることもあり、ある本では「楽しむ」になっている部分が、ある本では「楽しむ」になっているようなことも時々見られる。

古代語の動詞の活用の型には、四段・上一段・下一段・上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変・ラ変などの型がある。このような型がある以上、それぞれの型には、言わばそれらの諸型を存在させなければならない何らかの理由が存在するわけであると考えられるのである。そもそも、これらの諸型は

何の存在理由があり、かつ何らかの理由があるために、近代語への流れの上で整理されたのであろうか。本節では、上のような問題点に立って、まず、「楽しぶ・楽しむ」についての整理を行うことにする。

動詞化接尾辞のうち本節で主に取り上げるブ・ムについては、共時的に見るか通時的に見るかによって両者の関係についての見解は分かれてくる。

共時的にみてブ・ムを同一接尾辞の子音交替としているのは、坂倉篤義氏・東辻保和氏である。東辻氏は坂倉氏の説を受けてブ・ムを同一接尾辞の子音交替として、ガルとブ・ムの対比を試みられた。

通時的見て歴史的変化と捉えているのは、有坂秀世氏・阿部健二氏である。両氏とも子音交替についても配慮され、有坂氏は上代においてブ・ムは別のものであったが、平安時代に入ってブ動詞が上二段から四段に転じ、それが時としてマ行四段に変化したという見解を示された。³阿部氏はこの有坂氏の説に賛同し、アヤシブとアヤシムとの歴史的変化について述べられた。⁴関一雄氏もブとムとは別の接尾辞としているが、ブには古く名詞・形容詞語幹に結合するブ（上二段）と、もっぱら形容詞語幹に結合するブ（上二段）ム（四段）と交替するため四段にも活用とあるがとされる点で、有坂氏や阿部氏とは異なっている。さらにブ（上二段）は状態性表現を、ブ（上二段・四段）動作性表現を付加するものであり、ブ（上二段・四段）はム（四段）と同じような働きをする接尾語であったが、中古仮名文学ではブ（上二段・四段）はほとんど用いられなくなり、ブは上二段で状態性表現、ム（四段）は動作性表現をなすという明確な分担が確立したとされた。⁵

形容詞語幹・語基シの意味に対しての言及は多くないが、山口佳紀氏の、形容詞語幹＋ブ・ム型動詞が「～と思う」「～がる」の意になるか、「～の

3 有坂秀世（1955）『上代音韻考』三省堂。

4 阿部健二「『あやしぶ・あやしむ』考」新潟大学国文学会誌23。

5 関一雄（1993）『平安時代和文語の研究』笠間書院。

状態になる」「～の状態である」の意になるかは、形容詞語幹の意味的性格に左右されるという指摘は注目される。東辻氏にも「ブ・ム動詞の表現する内容が持続性を帯びているのは、語基の意義からすれば、むしろ当然の結果というべき」との指摘がある。

具体的に「楽しむ・楽しむ」（以下「楽しむ（む）」の形で示す）を例としてあげてみると、現代語「楽しむ」は、言うまでもなく五段に活用する語であるが、古代語では多く四段として使われており、上一段の存在を認めるかどうかは人によって異なっている。たとえば、「日本国語大辞典」では上二段の存在は認めず、「古語大辞典」「時代別国語大辞典」などではその存在が認められている。例えば、「時代別国語大辞典」では次のように書かれている。

「形容詞から派生した動詞は一般にバ行上二段活用である。推定しうる動詞タノシブもおそらく上二段と考えられる。」（時代別国語大辞典上代篇「楽しむ」の項の「考」）

さて、以上のように上代から平安時代にかけては、「楽しむ」が上二段活用であったとする証は多くはないが、一方「楽しむ」が四段であるとする証拠もない。

ということで、この二語は意味的には全く変わらないが、語形として「楽しむ」と「楽しむ」の二種がある。「楽しむ」の表記上の語形の推移は、表4-1に見られる通りである。形容詞との関係を見やすいために、「楽し」も対象的に入れてある。

表4-1で分かるように、「楽しむ・楽しむ」は和歌関係の資料においてはまったく出てこない。和文系としているものにも稀であり、主として集中的に出現しているのは説話としてまとめているものである。

説話の項に出現している「ぶ」と「む」両語形の推移を簡単にまとめると、次のようである。

- ① 「今昔物語集」及びそれ以前は「ぶ」の形が圧倒的に多かった。
- ② 「今昔物語集」より以降では「ぶ」の形は出現していない。

表4-1 「楽し」「楽しむ」「楽しむ」出現一覧表

資料名	楽し	楽しむ	楽しむ	資料名	楽し	楽しむ	楽しむ
(歌関係)				源氏物語	1	0	0
万葉集	14	0	0	夜の寝覚	0	0	0
古今集	1	0	0	浜松中納言物語	0	0	0
後撰集	0	0	0	堤中納言物語	0	0	0
拾遺集	0	0	0	狭衣物語	0	0	0
後拾遺集	0	0	0	海道記	0	0	0
金葉集	1	0	0	松浦宮物語	0	0	0
詞花集	0	0	0	平家物語	1	1	8
千載集	0	0	0	十六夜日記	0	0	0
新古今集	0	0	0	徒然草	2	5	5
金塊集	0	0	0	方丈記	0	0	1
(和文系)				(説話)			
土佐日記	0	0	0	日本霊異記	0	0	0
蜻蛉日記	0	0	0	三宝絵詞	0	0	0
枕草子	0	0	0	今昔物語	22	12	1
紫式部日記	0	0	0	古本説話集	0	0	0
和泉式部日記	0	0	0	古今著聞集	0	0	0
更級日記	0	0	0	発心集	0	0	0
竹取物語	0	0	0	沙石集	0	0	0
伊勢物語	0	0	0	(歴史関係)			
大和物語	0	0	0	古事記	1	0	0
平中物語	0	0	0	日本書紀	2	0	0
宇津保物語	0	0	0	風土記	0	0	0
落窪物語	0	0	0	古語拾遺	1	0	0

しかもこれらの形はいずれも四段動詞と見なしうるものであって、いずれも上二段の例と見なし得るものはない。

さて、この語の語史に関しては、時代別国語大辞典上代篇・室町篇にもとづくと、次のようにまとめられよう。

「楽しむ」は、本来は楽しむ（上二段）から派生し、楽しむ（四段）を経て楽しむ（四段）になったものである。その意味で元来は「楽しく思う」という意であったが、場合によって「富を得て、満足する」という意味もあって、また「心行くまでその状況に満足させ、浸らせるようにする」という意味にも解せられるので、ほかの使役相の形（下二段に活用フカム（深）タカム（高）など）から類定され、また下二段にも活用させられるように

なったものであろう。

これに対して、遠藤嘉基氏は次のように指摘している。

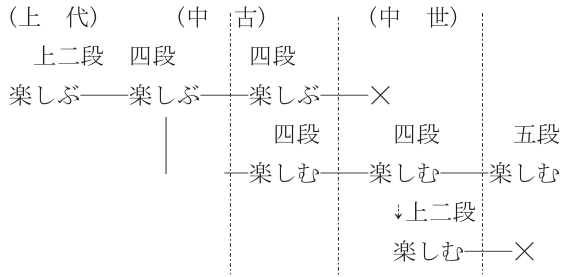
「さて、このような一段化、あるいは一段化へ至る二段化の傾向に対して、一方では四段化現象が見られる。…すなわち上代において二段活用であった「なぐ」（和）「ねぐ」（祈）や形容詞の語幹がバ行にはたらく語尾をとって動詞を構成する「～ぶ」の方は「～む」形をとり、共に四段化の傾向を通るけれども、点本の世界にあっては、依然として「～ぶ」であり、共に二段活用である。なお、点本には「形容詞語幹+む」の形もみえるが、この語形は主として初期の点本に限られ、だいたい女流文学の方に用いられる点を思うと、次のことが考えられないか。すなわち奈良朝から平安へかけて、形容詞に源を発する二つの新しい形の動詞が生まれたが、このうち「～む」の方は、主として女流語脈に採り上げられ、一方「～ぶ」形は男子語脈として使っていったのではないか。しかし、前者が女子文学に採用されたのは何故かという問題については、常識的であるが、やはり語感に原因するものと考えるべきであろうか。」⁶

以上述べてきたものをまとめると次のようになる。

- 1、[形容詞+ぶ]で成立する動詞は、一般にマ行四段化するが、訓点語ではやはりバ行上二段である。
- 2、[形容詞+む][形容詞+ぶ]の関係については
 - ① 訓点語では[形容詞+む]は主として初期のものに限られている。
 - ② [形容詞+む]は和文脈・[形容詞+ぶ]は漢文訓読脈に現れるという位相差があり、その原因は語感による。

さて、以上を通して述べてきたところをもって「楽しむ（む）」の語史を図式化すると次のようなものになろう。

6 遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究』P172。



上の図のように「楽しむ」から「楽しむ」までの語形の推移は四つの段階に区切れる。上代においては「楽しむ」という上二段動詞が源であり、中古に下っては、四段になって、強いて言えば「楽しむ」「楽しむ」両形が同一作品に現れる場合もある。中世ともなると、「楽しむ」は完全に「楽しむ」という四段動詞になり、現在に至っては五段動詞になっている。

以上は、「楽し」「楽しむ(む)」の語形(形態)についてまとめたものである。

4.2 意味上の考察

前では、「楽し」と「楽しむ(む)」の形態の関わりが分かるようになった。次は意味の場合はどうだろうか、見てみようと思う。語義の変化というと何か特別なもののように思われるかもしれないが、むしろ言語においては変わらないものを探す方が難しい。万物は流転するとか、諸行無常ということもよく言われるが、言語も変化するところに本質があるといえよう。

4.2.1 「楽し」の意味変遷

感情語彙は、意味変化しやすい語彙である。このことについては、従来、ある程度気づかれ、指摘されたこともある。⁷

7 宮地敦子(1979)「身心語彙の史の研究」明治書院。

山口仲美（1982）では、感情語彙の意味変化は次のように、二種類あると言っている。

- （1）発生当初から感情語ではあったが、表す感情的な意味が変化し、現在に至っている場合。
- （2）発生当初は、事物の状態・性質を表す状態語であったが、途中から感情語となり、現在に至っている場合。

（1）の変化は、感情語内での意味変化、（2）の変化は、状態語から感情語へとといった意味変化であると書いている。また、同氏の論文によれば、95語のうち、誕生してから意味変化せずに現在に至っている感情語彙は、約66.3%であることが分かるという。そして、山口は上代語の「樂し」を意味変化しない語としている。しかし、上代以降はどうなっただろうか。「樂し」はずっと同じ意味を持っていたらどうか。

実はそうではなかった。「樂し」は、現在では失われている意味を有していた。この語は、もっと遠い過去では現在のような情意性のものであった。その情意性の原因が固定した解釈によって規定され、力点が徐々に移動し、状態性形容詞に変じ、裕富であることを表すようになった。次いで又現在の我々が再び情意性のもんとして把握するに至った。以上は史的事実である。次は、この事実、この変遷の資料的裏づけから見てみたい。

現存する日本最古の作品『古事記』には、はじめて大和言葉として最初の「樂し」が登場している。

- ① 夜麻賀多迺 麻祁流阿袁那母 岐備比登々 等母迺斯都米婆多奴斯久
母阿流迺

山県に蒔ける菘菜あそなも吉備人共にし摘めば多怒斯久もあるか

（『古事記』 仁徳 岩波書店 P23）

それを現代日本語に訳すと、

「山の畠に蒔いた青菜のような何ということもない菜でも、吉備の人と一緒に摘めば、心楽しいことだ。」にあたる。ここから見ると、多奴斯（たのし）は明らかに「快い」という情意性を有する感情形容詞に違いない。

「楽し」の語源については、『古語拾遺』の「言伸レ手而舞」にも見られる。⁸

- ② 此の時に当りて、上天初めて晴れ、衆俱に相見て、面皆明白し。手を伸して歌舞ふ。相与に称曰わく「阿波礼。[言ふところは天晴なり。]阿那於茂志乃。[古語に、事の甚だ切なる、皆阿那と称ふ。言ふところは衆の面明白きなり。]阿那多能志。[言ふところは手を伸して舞ふなり。今楽しき事を指して多能志と謂ふは、この意なり。]」

(『古語拾遺』 岩波書店 P22)

②の「タノシ」は楽しいときに、タ(手)ノ(伸)シ、すなわち、手を伸ばして舞うからだというのである。ここで心が満ち足り伸びやかになるという意である。

また、『万葉集』には次のような歌がある。

- ③ 梅の花折りてかざせる諸人はけふの間は多怒斯久あるべし

(万葉集・八三二)

上の三つの例からみると、上代では、肉体的な快楽感を表したものなどが目立つ。しかし、大体同時代の『日本書紀』には次のような文がある。

- ④ 彼処雖復安楽
 彼処またやすに復安らかに楽しと雖も

——卷二 神代下 第十段

- ⑤ 入栄班貴盛之例
 栄班たのしきえ貴盛しき例に入れり

——卷十九 欽明天皇五年

その「タノシ」は、もと食物がふんだん豪勢にあって満腹満足の意である。後に転じて、富貴にして満足の意になっていた。それは「楽し」が状態性形容詞に変じ、裕福であることを表すようになった始まりであると思われる。

なお、『古今和歌集』には、次のような用例が見られる。

- ⑥ あたらしき年の始にかくしてこそ千年をかねてたのしきを積み

(古今和歌集第二十卷 おほうたどころのおほむた 大歌所御歌 岩波書店 P 324)

8 時代別国語辞典 P434。

この歌には「この部は、神に対し、又は、神の前で歌う神歌の大歌所御歌・神遊びの歌・東歌を集めた。大歌所御歌は、新嘗祭などの節会に供奉する令外の部署の大歌所で伝承・管理する歌」と注されている。

だから、ここでの「タノシキ」は神前・節会などで満ち足りた快い状態を表していると言える。本来、神の呪力によって物質的に不足のない理想的な状態が現れた時、その状態に対する褒め言葉として発せられた。宴の場にかかってこの言葉が多用されているのは、宴が神の来臨を迎える祭りに源がもつからである。

以上のように、奈良時代及び平安時代では、「楽し」は精神的に満ち足りて快適である意を表している。いわゆる情意性を持つ感情形容詞である。

そして、『源氏物語』にも、「楽し」の用例が見られた。

⑦ 「御わたくしにも、いかにたのしき御よろこび多くはべらん」

(浮舟 P194 新日本古典文学大系 岩波書店)

ここの「たのし」は新撰字鏡で「ゆたけし」と併存され、物質的な充足感を表している。源氏物語の中ではこの一例のみ見られた。

次に、鎌倉・室町時代の作品も見てみよう。

⑧ 若シ我レ此ノ玉ヲ取テ、買ハム人ニ与タラバ、子孫七代マデ家たのしク、
身豊ニシテ、貧キ思ヒ無カラム。 (『今昔物語』岩波大系一、P334)

⑨ 国内平ヤカニシテ、雨風時ニ随テ、穀ヲ損ズル事無クシテ、造リト造
ル田畠たのしク生弘ゴリテ、国豊カナレバ…

(『今昔物語』岩波大系四、P311)

⑩ すくたのしと申き抑人は所願を成せんか為に財をもとむ錢をたからと
する事はねがひをかなふる…

(龍谷大学本 徒然草 下45ウ⑥ 勉誠社)

⑪ 父の卿ハ中納言マデコソ至シニ、その子ニテ正二位、官大納言、年僅
ニ四十四、大国アマタ給テ、家中タノシク、子息所従ニ至マデ朝思ニ
飽満テ、何ノ不足有テカ、今カル心ノ付ニケム。

(延慶本 平家物語 上69① 勉誠社)

以上の例を見ると、「楽し」はまずいつも物質的条件と結びついている。さらに、それが物質的条件の充足から来る情意表現であるのではなく、物質が充足しているという客観的事実そのものをさしている。

その特徴は『時代別国語大辞典室町時代編』の「楽し」の項「富んでいて、物質的に豊かであり、何の不足・不満もない状態である。また、そうして、精神的にも充足した状態である。」と一致している。

以上のように、もともと情意性を持った「楽し」がだんだん属性形容詞になったのである。その原因は何であろうか。やはりその変化は人間の意志・感情によるのである。

むろん、例えば「楽し」がある時期に特殊な意味を持つようになったり、またその用法がなくなったりするのは、第一に人間精神の全体的な考察、すなわち言語以前の思索の世界からことが始まるのであろう。人間には、さまざまな欲求がある。飢餓、苦痛の回避、睡眠といった生理的な欲求から、名誉、地位、金銭、支配といった意識的な意図にいる社会的な欲求まで、限りなく多くの欲求を持っている。言い換えれば、物質的世界への関心という時代的あり方が「タノシ」の意味変化の最初の重要な原因であると言えよう。

では、状態性の「楽し」はどのように現代語の「心に満足してうれしい」という意を表す「楽しい」になったのか。それは、状態を表す語が、やがて状態に接する心持を表すようになってきたと思われる。「日本語の形容詞は、主観的な感情を表す語から客観的な状態を表す語に変化することが多く、その反対は稀である。」⁹と言われることもあるが、「楽し」の語史を辿って見ると、「楽し」は特例と見られる。

このように、「楽し」は情意性→状態性→情意性という方向に変わってきたのである。語義変化を全体として考えようとすることは普遍性を求めることである。しかし、語義変化の理由を考え、語義変化の特色を考えよ

9 宮地敦子(1979)「身心語彙の史の研究」明治書院。

うとすれば、やはり、個々の語の研究に戻ってこざるをえない。語は一語ごとに文化的・社会的背景があって異なった変化を辿る。日本の文化・社会の変化が語義変化に反映してくるわけである。ここで考えたかったのは、「楽し」の歴史の変遷によって日本人の古代以来の心情史、生活状態が見えるのではないかということである。

4.2.2 「楽しむ(む)」の意味

もうすでに言ったように、「楽し」・「楽し(ぶ)む」は同じ語基を持っており、形としてはつながりを持っていることは一目瞭然である。ここでは「楽し(ぶ)む」の意味は「楽し」とどういう関係にあるかを考えてみたい。

前節で古文における「楽し」の意味変遷を考察した。「楽し」という語の意味をまとめて見ると、大体次のようになっている。

- (1) 精神的に満ち足りて快い、愉快である。
- (2) 物質的に裕福である。豊かである。

という精神・物質両面での満足という意味を持っている。従って、「楽し」は主観的な情意性と客観的な状態性を表す語ではないかと思われる。

では「楽し(ぶ)む」はどんな意味合いを持っているのだろうか。まず古典作品からの例文を見てみよう。

- ① 太子先^{いで}ニ出テ、道ニ老人^{らうにん}ヲ見テ憂^{うれへ}ノ心有テ楽ブ心無シ。

(『今昔物語』岩波大系一、P11)

- ② 太子車^{めぐら}ヲ廻シテ宮ニ返テ、自ラ此^{かへり}ノ事ヲ悲テ弥^{みづか}ヨ楽ブ事無シ。

(同上P12)

上の二例は自動詞の例で、「快く感ずる。楽しく思ふ」という意であり、「楽し」の意と対応している。「楽しむ(む)」が「思ふ」と結合して用いられるのは、即ち「楽しむ(む)」が「思ふ」と同類の語—心理語であるから相違ない。「思ふ」ことは、それが態度なり外観なりにあらわれるということを必ずしも意味しない。ただ心の中でそういう「楽し」気持ちを生じれ

ばよいのである。結果的にはその気持ちがある言動に表れることがあったとしても、「楽しむ（む）」の意味範囲は心理現象にとどまっているのである。その故、「楽しむ（む）」には、

- ③ 汝^{なむ}乎^{すみやか}速^{とも}ニ太子ノ朋^{なり}ト成^{たのし}テ、世間ノ五欲ヲ^{きかせ}楽^{たのし}バム事ヲ語り聞テ、出家ヲ
 樂^{ねが}フ心ヲ留メヨ。 (『今昔物語』 岩波大系一、P13)

など、「心」でという快い方がなされるのである。

なお、『徒然草』には、

- ④ かうも山澤にあそひて魚鳥を見れば心たのしふといへり
 (『龍谷大学本 徒然草』 上14才⑩)

- ⑤ 心をやすくせんこそしはらくたのしふともいひつへけ…
 (同上『徒然草』 上46ウ⑥)

という例がある。これらの用例から見ると、「楽しむ（む）」は心理語であることがわかる。それだけではなく、そこから一步出て、態度や言動を伴われるものと思われる。また、その快楽感^{たのしみ}は心の底から沸き上がり、何らかの誘因によって表に現れるのである。

④⑤の例には、「楽しむ」は「楽しく思ふ。愉快心が満ち足りて安らぐ」という意味を持つ自動詞である。

それに対して、次の例文は少々違っている。

- ⑥ 楽^{たのし}ブニ閑放^{かんぼう}ニ於射山^{やさん}之居^{のきよ} (延慶本 平家物語 勉誠社537⑩)

- ⑦ いける間生をたのしますして死にのそむて死…
 (龍谷大学本 徒然草 勉誠社 上56才④)

以上の古典例から見ると、「楽しむ」にしても、「楽しむ」にしても皆「～を～」という形を持っており、「楽し（ぶ）む」の対象を表す。⑤⑥の自動詞と違って、他動詞になったのである。意味は簡単に「楽し」と思うのではなく、「五欲、閑放」などを興味として感じ、楽しみ好むという意になっている。

以上の例は、自動詞にせよ、他動詞にせよ、主観的な精神的な面の意味を持っている。その点で「楽し」と一致している。

しかし、「楽し」には客観的な物質的な満足を表す意味を持っていることが明らかになったが、「楽しむ（む）」にもそのような意味がないだろうか。では、次の例を見てみよう。

⑧ 高宗^{かうそう}在位三十四年、国^{しづか}静ニ民^{たのし}楽メリ。

（延慶本 平家物語 勉誠社 上48⑩）

この例は、物質的に豊かに、満たされた状態にあることを表している。客観的な状態性を持っているのは言うまでもない。これも「楽し」の状態性とほぼ対応していると言えよう。

以上のように、「楽しむ（む）」は意味の面で「楽し」と対応していることがわかる。以下「楽し」・「楽しむ（む）」の意味を下の表4-2にまとめてみた。

表4-2 「楽し」・「楽しむ（む）」の意味対照

	楽し	楽しむ・楽しむ
情意性 (主観的)	精神的に満ち足りて快い。愉快である。気持ちがよい。	(自) 楽しく思ふ。愉快に感ずる。心が満ち足りて安らぐ。 (他) ~の中に、あるいはその状態において心の満足を感ずる。趣味や娯楽として感ずる。
状態性 (客観的)	物質的に満たされて豊かであるさま。裕福である。	富み栄える。豊かに富む。

表4-2に示されているように、まず「楽し」・「楽しむ（む）」の意味を情意性・状態性に分けて見よう。情意性の場合、「楽し」は「精神的に満ち足りて快い」という意を表す。「楽しむ（む）」はそれに対して自動詞の場合が「楽しく思ふ」、他動詞の場合は「満足を感ずる」という意になる。状態性の場合、両方ともに「物質的に富む」という意味対応がさらに明白に見られる。

前節で述べたように、感情動詞「楽しむ（む）」は感情形容詞「楽し」から派生したものである。だからこそ、意味においても、「楽し」・「楽しむ（む）」は相互に対応して補い合っていると思われる。

4.3 用法上の考察

前節では、「楽し」・「楽しむ（む）」の意味変遷と意味対応について検討した。次に用法から考察したいと思う。

感情表現において、形容詞による表現と動詞による表現は、述語の種類と文脈との相関によってさまざまである。本章では「楽し」・「楽しむ（む）」に絞り、述語と文脈との関係を見ることにする。つまり、「楽し」・「楽しむ（む）」のような同種の感情を表す形容詞と動詞のペアを分析の対象にし、それぞれの表現における構文や場面の特徴を比較してみるわけである。このペアは、和文と訓読文の文体的対立の性質が顕著で、中古から中世に至るまで「楽しむ」から「楽しむ」への移行が認められているのである。

「楽し」「楽しむ（む）」について、まず、述語と主語との両面から整理するのがよいと思われる。そして、「楽し」と「楽しむ（む）」をめぐる文現象の考察を文体的、歴史的視点とも合わせて行おうとする。ここでは、はじめに、文献出現状況を概観し、次に文法的考察として、まず述語面を観察し、次に主語面を分析していくことにする。そして、「楽し」・「楽しむ（む）」に文法的な見通しを得た上で、文体的・歴史的な現象についての意味づけも試みたいと思う。

4.3.1 古典文献での出現傾向

前で述べたように、悲しみや喜びなどの感情を表現する述語には、形容詞を述語とする場合と動詞を述語とする場合とがある。例えば、以下のような場合がある。

A類 悲しい 楽しい 恐ろしい 悔しい……

B類 悲しむ 楽しむ 恐れる 悔いる……

このような現象は、現代語においてばかりでなく、古代語についてもおむね適合している。

古代語における文献資料を見てみると、次の二点が分かるようになる。

1、文体的に見ると、A類は和文系に、B類は漢文訓読文によく用いら

れる傾向が見られる。

2、歴史的に見ると、A類が先行し、B類が後行している。

もちろんこれは大まかに見た場合のことであって、A類が漢文訓読文にB類が和文に現れることもありうるわけで、語によってはA類よりもB類が先行するものも少なくない。しかし、和文系か漢文訓読文かは前述のように、「楽し」・「楽しむ(む)」における文体位相上の対立現象はその中で際立っている。筆者の考えでは、形容詞が先行し、動詞が後行しているのは、古代語から現代語への流れの現象として捉えられる。では、先に見た文法的な原則と、文体的、歴史的なこの傾向とはどんな関わりがあるのだろうか。

「楽しむ(む)」は先に述べたように『「楽し」と思う』という意であるが、こういう心理状態は何時の時代にも存在しているのであり、従って活用なり語形なりはともかくとして、こういう概念を示す語は、何時の時代にもいかなる文献にもあまり偏ることなく出現するものと考えられそうだが、事実は異なり、その出現に大きな偏りが見られた。前節で「楽しむ」の語形形式推移から見ると、和歌の類には歴史を通じて全く存在しない。次にいわゆる中古の和文類にも若干の例外的な存在を除いてはほとんど出現していない。出現するのは漢文訓読における場合と、今昔物語などの漢字仮名交じり文の系統であることが分かった。

以上述べたように、この「楽しむ(む)」の出現には大きな偏りが見られた。それを大まかに分類してみると、

- (1) 歌関係にはまったく出現していない
- (2) 和文系の文章にもほとんど出現していない

という二点にまとめられるが、この点では「楽しむ」「楽しむ」両語形に共通していることは前の表4-1に見られる通りである。

それでは、漢文訓読系統で用いられている「楽しむ(む)」は、和文語では、同義としてはどのような形で現れているのであろうか。まず、この点について考えてみよう。

そして、「楽し」・「楽しむ（む）」の各作品での出現頻度を示すと表4-3の通りである。表4-3によると、快楽の感情語彙は平安後期から多く用いられるようになったが、初めは「楽し」が多用された。「楽しむ」は訓読語として和文に使われないこともあって、平安後期までにはその用例が少なく、代わりに「楽しむ」が用いられたが、「楽し」よりもはるかに少ない。訓点資料には、「楽し」はほとんど見出せず「楽しむ」と「楽しむ」はともに普通に見出せる。和文には形容詞述語、訓読文には動詞述語という文体的対立と、形容詞述語から動詞述語へという歴史的展開が、「楽し」と「楽しむ（む）」の文献出現状況からも見られる。

表4-3 「楽し」・「楽しむ（む）」の文献出現状況¹⁰

	記	語	紀	万	古	葉	源	方	徒	平	今	計
タノシ	1	1	2	14	1	1	1		2	1	22	46
タノシブ									5	1	12	18
タノシム								1	5	8	1	15

既に述べたとおり、「楽しむ（む）」は、「楽し」という意であり、こういう心理状態はいつの時代にも存在しているはずである。例えば、

① 雪のさわける朝楽しも…（万葉集 三ノ二六二）。

② あたらしき年の始^{はじめ}にかくしてこそ千年^{ちせと}をかねてたのしき^つを積み

（新日本古典文学大系— 古今和歌集第二十卷P324 ^{おほうたどころのおほむうた} 大歌所御歌）

上の例のように、和文関係においては、「（私は）楽しい」という意を表す場合、直接「楽し」が使われている。その理由は何であろうか。

言うまでもなく、和歌や日記において叙事的な場合を除き、そのほとんどが作者の直接的な心情の現れである。このような直接的な心情の現れにおいて楽しいという意を表す場合は、「楽し」を使うのである。

現代語もこれと同様で、「楽しい」と言えるが、「私は楽しむ」とは言え

10 表4-3は付録から抜粋したものである。また、各作品の全称は省略される。

ない。つまり、「楽しむ(む)」は直接的な心情の現れの語ではないからである。例えば、

③ 今生こんじやうニ榮花たのしむべきヲ可楽身ニモ非ズ。 (『今昔物語』岩波大系三、P442)

④ 権門ノカタハラニ居ルモノハ、深クふか悦よろこブ事アレドモ、大キニ楽シムニ
アタハズ。 (新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』P16)

のように、「楽しむ(む)」を使う場面は、主に自らの立場や経験を説明・叙述する場合、または過去の体験を記述する地の文である。つまり、これは「楽しむ」のような直接的な心情の現れではなく、いったん自身の心理を客観にして説明するための語なのである。

上に述べたように、感情形容詞「楽しむ」は心情を表すのにふさわしく、感情動詞「楽しむ(む)」は情動の体験を記述するのにふさわしいと思われる。文献上の出現傾向からみると、「楽しむ」は和文系の文章に多用され、「楽しむ(む)」は漢文訓読系の文章によく使われることが分かるようになった。

4.3.2 述語部分での考察

述語部分での考察は、終止形用法、連用形用法、連体形用法などの三種類に分けて進めていきたいと思う。まず、終止形用法から説明しようと思う。

(1) 終止形用法

一般に情意形容詞は、属性形容詞などと比べて終止形用法として現れることが多いと言われている。¹¹これは言語主体の情意判断が文末の述部に託されやすいことと関係していると思われる。例えば、

① 「道ノ程寒ク御おほしマスラン」トテ、練色ノ衣ノ綿厚ねりいろ きぬ あつき ひきかさねヲ、三ツ引重テタレバ、
楽ト云バ愚也たのし いへ おろかや。 (『今昔物語』岩波大系五、P72)

② 「王恩わうおん よろこびヲ悦たのしテ都へ帰リ楽ム」トヨメリ。

11 吉田光浩氏「平安期和文形容詞の活用分析——因子分析の応用試論——」『国語学叢史の研究』。

(延慶本 平家物語 勉誠社 上315⑦)

- ③ たのしと申き抑人は所願を成せんか為に財をもとむ錢をたからとする事はねがひをかなふる…

(龍谷大学本 徒然草、勉誠社下45ウ⑥)

上の例から見ると、情意形容詞「楽し」は終止用法が多いのに対し、動詞「楽しむ」に終止用法が少ないのは「楽しむ」が情意判断を表しにくいためであると思われる。「楽し」は直接的な心情の現れについて楽しいという意を表すので、終止形で話者の気持ちを表すのである。それに対して、「楽しむ(む)」は客観的「心の満足を感じず」という意を表すので終止形用法が少なく、「楽ムト」という形で使われているようである。つまり、「楽しむ(む)」は直接的な心情の現れの語ではないからである。

(2) 連用形用法

「楽し」にしる「楽しむ(む)」にしる、連用形用法がよく用いられている。連用形用法の例は、形態上、「楽し」は接続助詞テがつく場合が少なく、「楽しむ」は複合語のような例が多い。

まず、「楽しむ」の連用形用法の例を見てみよう。

- ④ …待つ間なにたのしひかあらんまとへるものはこれを…

(龍谷大学本 徒然草、勉誠社 上46オ①)

- ⑤ …夜^よル^ひ昼^ひル楽しび遊^{あそ}バシメ給^{たま}フ事無^な限^りシ。

(『今昔物語』岩波大系一、P10)

- ⑥ 其上折^つ節^あ二付テ当^あラレケレバ、ユカリノ^{ものども}者共マダタノシミ榮ヘケリ。

(延慶本 平家物語 勉誠社 上37⑫)

テは完了助動詞ツの連用形に通じる。テによる連用関係と連用形による連用関係とは、ともに並列性を基本的意味関係とし、場合によって空間的共存・時間的継起性を表すことができる。しかし、テによる場合が共存性・継起性ともに普通に見られるのに対し、連用形による場合は共存性に偏る

という。¹²次は、共存性に勝る例と継起性が色濃い例をいくつか挙げてみる。まず共存性の例を見てみよう、

- ⑦ 『…「阿弥陀仏」ト申シツレバ、必ズ其ノ人ヲ迎テ、楽ク微妙キ国ニ思ヒト思フ事叶フ身ト生レテ、遂ニハ仏トナム成ル』ト。

(『今昔物語』岩波大系四、P154)

- ⑧ 若シ我レ此ノ玉ヲ取テ、買ハム人ニ与タラバ、子孫七代マデ家楽ク、身豊ニシテ、貧キ思ヒ無カラム。(『今昔物語』岩波大系一、P334)

- ⑨ 父の卿ハ中納言マデコソ至シニ、その子ニテ正二位、官大納言、年僅ニ四十四、大国アマタ給テ、家中タノシク、子息所従ニ至マデ朝思ニ飽満テ、何ノ不足有テカ、今カル心ノ付ニケム。

(延慶本 平家物語 勉誠社 上69①)

次に継起性の例である。

- ⑩ …其レモ乞食に成テゾ楽クテ有ケル。

(『今昔物語』岩波大系三、P561)

- ⑪ 亦、近江ニ知ケル所ヲモ、偏ニ我ガ領ニシテゾ楽クテ過ケル程ニ…

(『今昔物語』岩波大系五、P302)

上の例から見ると、共存性が著しい例には連用形が普通で、継起性が顕著な場合にはテがつくことが多い。

共存性を示す場合、「楽しく(て)」はすべて直後に共存する形容詞がついているが、「楽しむ(む)」は⑤⑥のように、複合動詞という形で現れる場合もある。共存する感情語は、並列する後項の形容詞が「めでたき」、複合する動詞は「遊ぶ」「栄へる」と結合し、形容詞のほうは共存する感情の熟合度が深く、動詞の方は複合する動詞の使用率が高いと思われる。

12 山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院。

(3) 連体形用法

連体修飾を内の関係・外の関係という二分法に従えば、内の関係の場合は次のような例が見られる。

⑫ 将監^{みづか}自^{その}ラ其水ヲ飲ムニ、身冷クシテ^{すずし}楽^{たのし}キ心有り。
 (『今昔物語』 岩波大系三、P88)

⑬ 太子先^{いで}ニ出テ、道^{らうにん}ニ老人ヲ見テ^{うれへ}憂^{あり}ノ心有テ^{たのし}楽^{あり}ズ心無シ。
 (『今昔物語』 岩波大系一、P11)

以上の例は、「楽し」・「楽しむ」両方ともに心のような意識の内面を表す語を修飾しているということが分かる。

「楽し」・「楽しむ」は外の関係の非修飾語の形式名詞コト、実質名詞がほとんどである。例えば、

⑭ 音高き鼓の山のうちはへて^{たのし}楽^き御代となるぞうれしき
 (『金葉和歌集』、岩波書店 P88)

⑮ 餓^{うま}ノ心皆止テ^{たのし}楽^き事無限シ。
 (『今昔物語』 岩波大系三、P475)

⑯ 此ハ糸^{いと}楽^しシキ世界也。
 (『今昔物語』 岩波大系五、P35)

⑰ 遊ぶ内の^{たのし}楽^き庭に梅柳折りかざしては思ひなみかも。
 (『万葉集』 17/3905)

⑱ 太子車^{めぐら}ヲ廻^{かへり}シテ宮ニ返テ、自^{みづか}ラ此ノ事ヲ悲^{かなし}テ^{いよいよ}弥^{たのし}ヨ楽^きズ事無シ。
 (『今昔物語』 岩波大系一、P12)

ここにおける「タノシ」の諸例は皆豊かで満ち足りた状態を形容している。属性形容詞の意味特徴を持っているということが前節で述べたのと一致している。そして、「楽し」の場合は、形式名詞「事」が以外にも、実質名詞「世界」「島」などを修飾している。それに対して、「楽しむ」の場合は「事」しか修飾していない。

また、「楽し」にしても「楽しむ(む)」にしても、その感情を誘発する機縁(対象)がコトの形式(述語句)で示されることが多いと思われる。所引文献の制限もあるが、やはり「楽し」・「楽しむ(む)」の連体修飾用

法において、内面より外面によることが多いのではないかと思う。

4.3.3 主語部分の考察

(1) 助詞の潜在と顕在及びその種類

「楽し」・「楽しむ（む）」の主語部について、まず助詞の有無とその種類を比べてみよう。例えば、

- ① 若シ我レ此ノ玉ヲ取テ、買ハム人ニ与タラバ、子孫七代マデ家たのし樂ク、
ゆたか身豊ニシテ、まづし貧キ思ヒ無カラム。 (『今昔物語』岩波大系一、P334)
- ② 此テ、五位、一月許有ニ、万ツたのし樂キ事無限。
かく (『今昔物語』岩波大系五、P74)

上の二例から、現代形容詞文によく使われている主格助詞「が」は古文においてはあまり示されていないことがわかる。

助詞を顕在させる場合は、次のように、副助詞になる。例えば、

- ③ …御身一ツハ樂クテ御マシナム。 (『今昔物語』岩波大系五、P301)
- ④ 本ノ栖すみかヨリモ樂クテたのしゾ有ケル。 (『今昔物語』岩波大系一、P394)

感情の対象を示す語句を主語として、「楽し」が述語として働いている。つまり、「楽し」による形容詞文においても、格関係は整っておらず、主語述語関係を基本とする情意判断としての文構造をなしているのである。

他方、「楽しむ」は、対象になる語を示す場合に、格助詞が必ず顕在する。

例えば、

- ⑤ 今生こんじやうニ榮花たのしむべきヲ可樂身ニモ非ズ。 (『今昔物語』岩波大系三、P422)
- ⑥ 汝なむチ速ニ太子ノ朋ト成テ、世間ノ五欲たのしヲ樂バム事ヲ語り聞テ、出家きかせヲ樂ねがフ心ヲ留メヨ。 (『今昔物語』岩波大系一、P13)
- ⑦ 人事おほかるなかに道たのしむをたのしむより気味ふかき。

(龍谷大学本 徒然草 勉誠社下21ウ⑤)

以上の例から見ると、「楽し」は助詞を明示しないことが多く、助詞が顕在する場合の多くは係助詞・副助詞で、格助詞が現れることはあまり多くない。これに対して「楽しむ」は、格助詞を明示することが普通である。

(2) 「楽し」・「楽しむ(む)」の対象の性質

まず、名詞を対象にとる場合、「楽し」は具体物を表すものをとる場合が多い。しかも、形、外見などに焦点をあてて述べられることが多い。例えば、

- ① 国内平ヤカニシテ、雨風時ニ随テ、穀ヲ損ズル事無クシテ、造リト造
たひら したがひ
 田島楽ク生弘ゴリテ、国豊カナレバ…
でんぱくたのし おひひろ
- (『今昔物語』岩波大系四、P311)

- ② 極テ楽キ島ニテゾ有ナルトナン語り伝ヘタルトヤ。
きはめ たのし あん
- (『今昔物語』岩波大系五、P49)

上の「楽し」は主に肉体的、精神的に満ち足りた状態を表す。その故に、対象は具体的(田島・島)である。それに対して「楽しむ」は形を持たない抽象的概念を表すものにとりやすい。例えば、

- ③ 今生ニ楽花ヲ可楽身ニモ非ズ。 (『今昔物語』岩波大系三、P422)
こんじやう たのしむべき
- ④ 汝なむチ速すみやかニ太子ノ朋ト成テ、世間ノ五欲たのしヲ楽バム事ヲ語リ聞テ、出家ヲ
ねが
 楽フ心ヲ留メヨ。 (『今昔物語』岩波大系一、P13)
きかせ

③④では、「楽花・五欲」などの抽象的对象を取る。「楽しむ」は「悲しむ」の反対語で、心ゆくまでその状況に満足するという意である。

以上から見ると、「楽し」はよく具体物や、表面的な対象を感情対象としている。それに対して、「楽しむ(む)」は抽象的、内面的な対象をとる場合が多いことが分かった。

(3) 誘因動詞

感情の対象を直接に示す形ではないが、快樂の感情が起こる機縁・誘因となるものを示す場合に、「見る」などの動詞を介する句をとる形がある。ここで一応、それらの動詞を誘因動詞と呼ぶことにする。では、次の例を見てみよう。

- ① 然ラバ、我レ大水ニ入テ、広キ目ヲ見、楽クナム可有」ト告グ、ト見
おほみづ たのし あるべき
 テ夢覚ヌ。 (『今昔物語』岩波大系四、P289)
さめ

- ② 太子先^{いで}ニ出テ、道ニ老人ヲ見^{らうにん}テ憂^{うれへ}ノ心有^{あり}テ楽ブ心無シ。

(『今昔物語』 岩波大系一、P11)

- ③ かうも山澤にあそひて魚鳥を見れは心たのしふといへり

(龍谷大学本 徒然草 勉誠社 上14才⑩)

以上の例のように、「楽しむ(む)」に介される動詞の種類は、「楽し」は「見る」だけでなく、「食う、飲む」なども用いられている。「楽しむ」は「見る」に集中している。例えば、

- ④ 将監自^{みづか}ら其^{その}水ヲ飲^{すずし}ムニ、身冷クシテ楽シキ心有^{たのし}り。

(『今昔物語』 岩波大系一、P88)

- ⑤ 義睿此^{これ}ヲ食^{くひ}テ、日来ノ餓^{ひころ}皆直^{うま}テ、楽シキ心ニ成^{なほり}ヌ。

(『今昔物語』 岩波大系三、P199)

以上の例は、動作自体が快感を引き起こすのではなく、その動作を契機として内面の思いが出てくるのである。このように、誘因動詞と「楽し」・「楽しむ」をつなぐ形態は、「楽し」は「連用形」・「連体形+ニ」・「連用形+テ」など三つの形態があり、「楽しむ」は「連用形+テ」という形であることが多い。

4.4 感情の主体と人称

これまで、述語部分と主語部分とに分けて、快楽の感情表現文の特徴を見てきたが、文全体に関わる重要な要素としてもう一つ、快楽の感情を抱く主体が誰であるかという問題もある。川端善明は、情意形容詞の述語には、「情意の主体は常に一人称「我」として意味的に潜んでいる」とされ、「情意性述語はこの「我」の潜在的な主語とともに、一つ「句」の体制をなしている」と言われている。¹³情意の主体「我」は述語に潜みながら主語として現れるのである。川端氏の「情意の主体」を、本論文では、「感情の主体(感情主)」とすれば、情意形容詞「楽し」の感情主は一人称であって、

13 川端善明氏(1976)「用言」『岩波講座日本語6文法1』岩波書店。

通常は潜在していながら、時に主語として顕在すると言うことができる。

次に、「楽し」・「楽しむ」が述語になっている文において、会話文・心話文・地の文の別によって、感情の主体が潜在するか主語として顕在するか、感情の人称は何であるかを見てみようと思う。

表4-4は、タノシ・タノシブが状態性を表す文を除いて、感情を表す文において、会話文・心話文・地の文の別にしたがって、感情の主体が潜在するか主語として顕在するか、感情の人称は何であるかとを、整理したものである。

表4-4 「楽し」・「楽しむ(む)」の主体と人称

		会話文			心話文			地の文			合計
		一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称	
タノシ	潜在	3	2	1	1					5	12
	顕在	1	2	1	1					4	9
タノシブ	潜在	1	1							2	4
	顕在	1	2	3	1					3	10
計		6	7	5	3					14	35

まず、「楽し」は、会話文・心話文では、感情主が一人称であることが普通である。例えば、

① 然ラバ、我^{おほみづ}レ大水ニ入テ、広キ目ヲ見、楽クナム可有^{たのし}ト告グ、ト見テ夢覚ヌ。^{あるべき}（『今昔物語』岩波大系一、P289）

② 若シ我^もレ此ノ玉ヲ取^{とり}テ、買ハム人ニ与^{あたへ}タラバ、子孫七代マデ家^{たのし}楽ク、身^{ゆたか}豊ニシテ、貧^{まづし}キ思ヒ無カラム。（『今昔物語』岩波大系一、P334）

などわずかな例で、いずれも「我レ」は従属節の内部にのみ主語として働いているとも解され、「楽し」の感情主として示されたものではないかと思われる。時に二人称・三人称が感情主になる場合もある。例えば、

- ③ …其レモ乞食に成テ樂クテ有ケル。

(『今昔物語』岩波大系三、P561)

- ④ 義春此ヲ食テ、日來ノ餓皆直テ、樂シキ心ニ成ヌ。

(『今昔物語』岩波大系三、P199)

などのように、二人称の場合、聞き手が楽しいと感じるとともに、話者も当事者として関わり、三人称では、話し手は世間一般的な感情を表している。

- ⑤ 此テ、五位、一月許有ニ、万ツ樂キ事無限。

(『今昔物語』岩波大系五、P74)

三人称が感情主である場合は、上のように、話者が自らを第三者として扱って語ることもあると思われる。これらはいずれにしても、話者の感情が二人称・三人称の主体に同化している。また、心話文での感情の主体は、一人称に限られている。

地の文に用いられた「樂し」の主体は、すべて三人称である。

- ⑥ 長者其ノ甘露ヲ受テ服スルニ、忽ニ餓ヘノ苦ビ皆止テ樂シキ心ニ成ヌ。

(『今昔物語』岩波大系一、P162)

- ⑦ 自ラ其水ヲ飲ムニ、身冷クシテ樂キ心有リ。

(『今昔物語』岩波大系一、P88)

- ⑧ 納言マデコソ至シニ、その子ニテ正二位、官大納言、年僅ニ四十四、大国アマタ給テ、家中タノシク、子息所従ニ至マデ朝思ニ飽満テ、何ノ不足有テカ、今カル心ノ付ニケム。

(延慶本 平家物語 勉誠社 上69①)

地の文の「樂し」では、感情主が潜在する場合と顕在する場合が相半ばである。しかし、これらは、積極的に「樂し」の感情主を示した主語表示とは言えず、感情主は原則として潜在すると考えるべきである。

次に、「樂しぶ」であるが、会話文では一人称と二人称が多い。一人称への集中度は「樂し」に比べて低くなっている。従って、一人称が潜在する場合が多いが、顕在する場合もある。例えば、

- ⑨ 我レ此ニシテ^{たのし}楽^{いへ}プト云ドモ、旧里ノ妻子常ニ恋シ。
ふるさと

(『今昔物語』 岩波大系三、P52)

次の例は二人称と三人称の場合の例である。

- ⑩ 汝^{なむ}チ速ニ^{すみやか}太子ノ^{とも}朋ト^{なり}成テ、世間ノ五欲ヲ^{たのし}楽^{きかせ}バム事ヲ語り聞テ、出家ヲ^{ねが}楽フ心ヲ留メヨ。
めが

(『今昔物語』 岩波大系一、P13)

のように、訓読表現として用いられている。また、他はすべて三人称で、感情主が明示されるのが普通である。例えば、

- ⑪ 本ノ^{すみか}栖ヨリモ^{たのし}楽^{あり}クテゾ有ケル。
あり

(『今昔物語』 岩波大系一、P394)

- ⑫ 其ノ^{のち}後、其ノ^め妻大臣ヲ^{こひ}恋悲ムデ、弟ノ語ニ^{たのし}不^し楽^ばズ。
たのし

(『今昔物語』 岩波大系一、P181)

総じていえば、感情の主体は、「楽し」では述語に潜在的に備わっているが、「楽しむ」は述語に対応する主語として顕在する傾向があると思われる。

以上のように、述語部分・主語部・感情の主体にわたって述べてきた「楽し」と「楽しむ」の文法的な特徴をまとめると、表4-5のようになる。別々に観察してきた特徴をこうして並べてみると、個々の現象の底にある「楽し」と「楽しむ」との基本的な性格が見えてくる。

表4-5から分かるように、

第一、「楽し」は日本語の古文における使用率は「楽しむ」の使用率より高い。特に、述語部分における用法の使用率の差が著しい。

第二、「楽し」は時に係助詞を顕在させるのに対して、「楽しむ」は常に格助詞を顕在させる現象が特に明白である。「楽し」に、誘因動詞に導かれる現象が多いのも、情意判断としての性質によるものであろう。

第三、「楽し」の情意判断は、目の前の生々しい具体的対象をそのまま知覚したときに起こるものであるが、「楽しむ」では意識の内面において抽象的な概念世界に及んでいる。

第四、情意判断においては、一人称の感情の主体が常に潜んでいて、感情主は、「楽し」では潜在するが、「楽しむ」では主格関係的に主語になっ

表4-5 「楽し」・「楽しむ」の文法的特徴

		楽し (数)	楽しむ (数)
述語部分	終止	楽しト (6)	楽しむ 楽しむト (6)
	連用	楽しク 楽しクテ (20)	楽しビ遊ブ 不楽しズ (3)
	連体	楽しきココロ 楽しコト (19)	楽しブ心 楽しブ事 (4)
	未然		不楽し 楽しバム 不楽しザル (5)
主語部分	助詞	潜 (17) 副助詞 (4)	顕 (8) 格助詞 ヲ (8)
	対象語	具体物 有形 表面 (2)	抽象 無形 内面 コト (3)
	誘因動詞	見ル (1) 食フ (1) 飲ム (1) 連体形+に 連用形+テ	見ル (5) 連用形+テ
感情主	会話文	一人称 (4) 潜在 (3)	一人称 (2) 二人称 (3) 潜在 (1)・顕在 (2)
	地の文	三人称 (9) 潜在 (5)・顕在 (4)	三人称 (5) 潜在 (2)・顕在 (3)

て顕在しやすくなる。地の文において三人称を主体として語る場合も、「楽し」の場合はなお一人称の潜在が目立ち、「楽しむ」は三人称の顕在がより目立つ。

以上の四点にまとめられる「楽し」と「楽しむ」の基本的な性格は、相互に深く関連していると考えられる。

さて、前章で見たように、「楽し」は和文的文章、「楽しむ」は訓読的文章に用いられやすいという対応があったが、そうした文体的な相違を、上の文法的な相違とどのように結びつけて考えたらよいのであろうか。和文は、情意に発する表現を洗練する方向で発達を遂げた文章で、現実世界を生き生きと描写し、日本語本来の文法的特性を豊かに内包している文体であるから、目の前の生々しい体験をもとにした情意判断を一人称的に表す

形容詞「楽し」の性格にふさわしい。

訓読文は公的世界で発展してきた文章で、抽象的で観念的な性質を持ち、日本語固有の情意性が論理によって抑圧されている文体であって、意識の内面の抽象的概念世界での論理的関係づけを表す動詞「楽しむ」の持つ性格にふさわしい。文体的な対照は、こうした文法的な性格の反映として説明されるべきであろう。したがって、「楽しむ」は漢文訓読語だが、出典漢文の訓読表現として用いられているのは一部分の用法の例に過ぎなかった。語の性質が訓読文の性質になじみ、和文の性質に拒まれたことが、この語が漢文訓読文に多用され、和文に用いられないことの要因であろう。

以上のように、古文における「楽し」と「楽しむ」との文法的な異なりを、できるだけ広く考察してきた結果、基本的な差異として四つの点を見出すことができ、複雑な文現象もその四点の絡まりの中に現れたものと考えられる。また、文体的な対照性も、文法上の対照性の反映として捉えることが可能であるという見通しも得られた。

5. 終わりに

感情の意味規定、感情用言の認定、分類、範疇を検討し、日本語の情意を表す用言の語彙には形容詞と動詞がある。形容詞には感情・感覚を表す語彙があり、動詞には感情・感覚、希望・願望、意志、思考を表す語彙があると分かった。そして、古文における感情形容詞「楽し」・感情動詞「楽しむ」を中心に、形態、意味、用法という三つの角度から考察してきた。その結果、以下のようなことがまとめられると思われる。

- 1、形態においては、「楽しむ（む）」は「楽し」から派生したものと見られる。

「楽し」・「楽しむ（む）」ともに語基「楽シ」を持っているのである。形としてのつながりがあることが明らかになった。

- 2、意味としては、「楽し」は先行し、「楽しむ（む）」は後行しているから、「楽しむ（む）」の意味は「楽し」によって発生してきたと思われる。

情意性の場合、「楽し」は「精神的に満ち足りて快い」という意を表す。それに対して、「楽しむ（む）」は自動詞の場合が「楽しく思ふ」、他動詞の場合が「満足を感じる」という意になる。状態性の場合、両方ともに「物質的に富む」という意味対応がさらに明白に見られた。意味においては、「楽し」・「楽しむ（む）」は相互に対応して補い合っていると思われる。

「楽し」は情意性→状態性→情意性という方向に変わってきたのである。意味においては、語義変化というのは、何らかの文化的・社会的な変化を背景として、人間の見方や考え方が変わってくることによって起こる。さらに言えば「楽し」は日本人の文化の歴史を反映しているわけである。

3、用法の場合、ずいぶん違いが見られた。まず、出典の傾向からみると、「楽し」は和文系の文章に多用され、「楽しむ（む）」は漢文訓読系の文章によく使われているのである。構文の上では、「楽し」は用法が広いのに対して、「楽しむ（む）」は限定されている。「楽し」はよく格助詞、人称を潜在させることが多く、「楽しむ（む）」は格助詞、人称を顕在させることが多い。感情の対象においては、「楽し」はよく具体物で、表面的な対象をとる。それに対して、「楽しむ（む）」は抽象的、内面的な対象をとっているのである。

このように、本論文は古文の用例から感情形容詞「楽し」・感情動詞「楽しむ（む）」について対照的に考察してきた。引用文献は主に上古から中世までである。本論文においての「楽し」・「楽しむ（む）」の考察は感情語に対する一つの試みに過ぎない。本人の勉強不足と時間の関係で、不十分なものとなってしまったが、本論文を皮切りとして、これからもっと多くの語について、真剣に研究し、出来るだけ感情形容詞・感情動詞の語彙の特徴を見つめ、体系的にまとめようと思う。それらは、今後の課題として感情語の研究を続けて行きたい。

参考文献

山本俊英 (1955) 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』23)

武蔵野書院.

- 鈴木重幸 (1957) 「日本語のすがた (アスペクト) について」むぎ書房.
 川端善明 (1967) 「用言」『岩波講座日本語6 文法I』岩波書店.
 東辻保和 (1970) 「古典感情形容詞の一視点」『文学・語学』56.
 宮島達夫 (1971) 「古典対照語い表」笠間書院.
 国立国語研究所・宮島達夫 (1972) 「動詞の意味・用法の記述的研究」(国立国語研究所報告43) 秀英出版.
 国立国語研究所・西尾寅弥 (1972) 「形容詞の意味・用法の記述的研究」(国立国語研究所報告44) 秀英出版.
 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』.
 九鬼周造 (1975) 「情緒の系図」『文芸論』岩波書店.
 慶野正次 (1976) 「形容詞の研究」笠間業書.
 田中章夫 (1978) 「国語語彙論」明治書院.
 阪倉篤義 (1978) 「語構成の研究」角川書店.
 宮地敦子 (1979) 「身心語彙の史の研究」明治書院.
 阪倉篤義 (1980) 「語彙史」『講座国語史』第3巻大修館書店.
 山口仲美 (1982) 「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学4 語彙史』明治書院.
 寺村秀夫 (1982) 「日本語のシンタクスと意味I」くろしお出版.
 寺村秀夫 (1984) 「日本語のシンタクスと意味II」くろしお出版.
 鈴木一彦ら (1984) 『研究資料日本文法第3巻用言編(二) 形容詞・形容動詞』明治書院.
 山口佳紀 (1985) 「古代日本語文法の成立の研究」有精堂.
 前田富祺 (1985) 「国語語彙研究史」明治書院.
 大野晋 (1987) 『文法と語彙』岩波書店.
 荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会編『ことばの科学』むぎ書房.
 細川英雄 (1989) 「現代日本語の形容詞分類について」『国語学国語学会』.
 細川英雄 (1990) 「感情形容詞の連用修飾用法について」『近代語研究』武蔵野書院.
 飛田良文 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版.
 山崎馨 (1992) 「形容詞助動詞の研究」和泉書院.
 堀川智也 (1992) 「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』北海道大学.
 東弘子 (1992) 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限」和泉書院.
 前田富祺 (1993) 「日本語の感情を表すことば」『日本語学』明治書院.
 西尾寅弥 (1993) 「喜び・楽しみのことば」『日本語学』明治書院.
 吉田光浩 (1994) 「感情形容詞述語の関係成分について——源氏物語にみられる「うれし」の場合」『大妻女子大学 大妻国文』.
 尾崎暢殃ら (1994) 「万葉集辞典」武蔵野書院.
 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類——状態形容詞と質形容詞——」言語学研究会編『ことばの科学』むぎ書房.
 河原修一 (1998) 「感情を表す日本語のことば」『金沢大学 国語国文』.
 矢澤真人 (1998) 『日本語の感情・感覚形容詞』月刊『言語』27-3大修館書店.
 山岡正紀 (2000) 『日本語の述語と機能』くろしお出版.
 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」言語学研究会編『ことばの科学』むぎ書房.『日本語学』2003年1月号(特集 感情を表す言葉) 明治書院.
 许罗莎 (2005) 『現代日语感情词研究』北京大学出版社.

付 録

用例出典一覧表

		楽し	楽しぶ	楽しむ
歴 史 関 係	古 事 記	①夜麻賀多迹 麻祁流阿袁那母 岐備比 登々等母迹 斯都米婆多奴斯久母阿流 迦 (仁徳)		
	古 語 拾 遺	①阿波礼。阿那於茂志力。阿那多能志。		
	日 本 書 紀	①彼処難復安楽(卷二 神代下 第十段) ②入荣班貴盛之例(卷十九 欽明天皇五 年)		
歌 関 係	万 葉 集	①矢釣山木立も見えず降りまがふ雪に駈 ける朝樂しも (03/0262)		
		②世間の遊びの道に楽しきは酔ひ泣きす るにあるべくあるらし (03/0347)		
		③この世にし楽しくありば来む世には虫 に鳥にも我れはなりなむ (03/0348)		
		④生ける者遂にも死ぬるものにあればこ の世なる間は楽しくをあらな (03/0349)		
		⑤正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招 きつつ樂しき終へめ (05/0815)		
		⑥梅の花折りてかざせる諸人は今日の間 は楽しくあるべし (05/0832)		
		⑦年のはに春の来らばかくしこそ梅をか ざして樂しく飲まめ (05/0833)		
		⑧玉敷きて待たましよりはたけそかに来 る今夜し樂しく思ほゆ (06/1015)		

歌 関 係	万 葉 集	⑨遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざして ば思ひなみかも (17/3905)		
		⑩垂姫の浦を漕ぎつつ今日の日は楽しく 遊べ言ひ継ぎにせむ (18/4047)		
		⑪しなごかる越の君らとかくしこそ柳か づらき楽しく遊ばぬ (18/4071)		
		⑫春のうちの楽しき終は梅の花手折り招 きつつ遊ぶにあるべし (19/4174)		
		⑬天地に足らほし照りて我が大君敷きま せばかも楽しき小里 (19/4272)		
		⑭霞立つ春の初めを今日のごと見むと思 へば楽しとぞ 思ふ (20/4300)		
		①あたらしき年の初めにかくしてこそ千 年てたのしきを積め (第二十卷 大歌 所御歌)		
		①音高き鼓の山のうちはへて来しき御代 となるぞうれしき		
		①御わたくしにも、いかにたのしき御よ ろこび多くはべらん (⑤)浮舟 P194)		
		和 文 系	源 氏 物 語 方 丈 記 徒 然 草	①すくたのしと申き抑人は所願を成せん か為に財をもとむ錢をたからとずする事 はねががひをかなふる… (下45ウ⑥)
②はり川相国は美男のたのしきにてその 事と… (上58オ①)	②ことさざりたのしひかなしみゆきかひて 花やか (上16オ⑦)			②いける間生をたのしみますして死にのぞ むて死 (56オ④)
	③心をやすくせんこそしはらくたのしふ ともいひつへけ… (上46ウ⑥)			③それは此理り有へからず人皆生をたの しませるは… (56オ⑤)

	徒然草		<p>④林にたのしふを見てせうはうの反としきとらへ (上70オ①)</p> <p>⑤いかりかなしひたのしふも皆、虚亡なれとも誰か (73ウ⑥)</p> <p>①薬ヲ閑放於射山之居 (上537⑩)</p>	<p>④心あらんこれたのしまんや生をくるしめて目</p> <p>⑤人事おほかるなかに道をたのしむより気味ふかき (下21ウ⑤)</p> <p>①臣内不楽、体外無悦。(下30⑫)</p> <p>②「王恩ヲ悦テ都へ帰り楽ム」トヨメリ。(上315⑦)</p> <p>③高宗在位三十四年、国静ニ民楽メリ。(上48⑩)</p> <p>④其上折節ニ付テ当ラレケレバ、ユカリノ者共マデタノシミ榮ヘケリ。(上37⑫)</p> <p>⑤今日ハ北岡ノ内ニ仕ヘテ、榮ミ榮ヘ給ヘバ、此曲ヲ奏シ給フモ理ドゾオボエル。(上315⑨)</p> <p>⑥生ヲ受サセ給シヨリ榮ミ榮ヘ、昔モ今モ類ナシ。(下44⑭)</p> <p>⑦龍顔ニ近付奉リシ四季境節ニ付テ榮ミ榮ママニハ、長生不死、齡ヲ願ヒ、蓬萊不死の菓ヲ求テモ… (下519⑮)</p> <p>⑧此王アマリニ榮ミ誇リテ、「ワザハヒト云物、イフナル物ナラム、哀レ、ミバヤ」ト宣ケリ。(上403⑭)</p> <p>①今生ニ榮花ヲ可樂身ニモ非ズ。(①422)</p>
和文系	平家物語	<p>①父の卿ハ中納言マデコロソ至シニ、その子ニテ正二位、官大納言、年僅ニ四十四、大國アマタ給テ、家中タノシク、子息所從ニ至マデ朝思ニ飽滿テ、何ノ不足有テカ、今カル心ノ付ニケム。(上69①)</p>	<p>①太子先ニ出テ、道ニ老人ヲ見テ憂ノ有テ薬ア心無シ。(①11)</p> <p>②太子車ヲ廻シテ宮ニ返テ、自ラ此ノ事ヲ悲テ弥ヨ薬ア事無シ。(①12)</p> <p>③太子此ノ度出テ薬ア事有ツヤ否ヤ (①12)</p>	
説話関係	今昔物語集	<p>①長者其ノ甘露ヲ受テ服スルニ、忽ニ餓ヘノ苦ビ皆止テ薬シキ心ニ成ヌ。(①162)</p> <p>②若シ我レ此ノ玉ヲ取テ、買ハム人ニ与タラバ、子孫七代マデ家榮ク、身豊ニシテ、貧キ思ヒ無カラム。(①334)</p>		

<p>説話関係</p>	<p>今昔物語集</p>	<p>③本ノ輮ヨリモ楽クテゾ有ケル。(①394) ④將監自ラ其水ヲ飲ムニ、身冷クシテ楽キ心有リ。(③88) ⑤養春此ヲ食テ、日来ノ餓皆直テ、楽シキニ成ヌ。(③199) ⑥餓ノ心皆止テ楽キ事無限シ。(③475) ⑦……便リ只付キニ付テ、家ナド儲テ楽クゾ有ケル。(③547) ⑧如此クシテ便付ニケレバ、吉夫出来テ楽シクゾ有ケル。(③552) ⑨其レモ乞食に成テゾ楽クテ有ケル(③561) ⑩打取タル侍ハ、忽ニた便有ル妻ヲ儲テ、不思懸ヌ人ノ徳ヲ蒙テ、福貴ニ成テ官ニ任ジテ、楽クゾ有ケル。(③566) ⑪「……「阿弥陀仏」ト申シツレバ、必ズ其ノ人ヲ迎テ、楽ク微妙キ国ニ思ヒト思フ事叶フ身ト生レテ、遂ニハ仏トナム成ル」ト。(④154) ⑫然ラバ、我レ大水ニ入テ、広キ日ヲ見、楽クナム可有」ト告グ、ト見テ夢覺ヌ(④289) ⑬国内平ヤカニシテ、雨風時ニ随テ、穀ヲ損ズル事無クシテ、造リト造ル田畠楽ク生弘ゴリテ、国豊カナレバ……(④311)</p>	<p>④なむ汝ヲ速ニ太子ノ朋ト成テ、世間ノ五欲ヲ楽バム事ヲ語り聞テ、出家ヲ樂フ心ヲ留メヨ。(①13) ⑤……夜ル屋ル楽シビ遊バシメ給フ事無限シ。(①10) ⑥我レ此ニシテ楽ブト云トモ、旧里ノ妻子常ニ恋シ。(③52) ⑦南ノ門ヲ出給ニ、道ニ病人ヲ見テ、此レヲ問聞給テ弥ヨ不樂給ハズ。(①12) ⑧王、太子ノ此ヲ見テ不樂ビ給ザルニ依テ贖リ給フ。(①13) ⑨太子先ニ城ノ東ノ門ヲ出テ、老人ヲ見テ不樂ズ。(①12) ⑩其ノ後、其ノ妻大臣ヲ恋慕ムテ、弟ノ語ニ不樂ズ。(①181) ⑪太子今、世ニ有テ五欲ヲ受ル事ヲ不樂ヌ。(①13) ⑫「……何事ニ依テカ、常ニ憂タル心有テ不樂ザルゾ」ト。(①15)</p>
-------------	--------------	---	--

説 話 関 係	今昔物語集	⑭此ハ糸染シキ世界也。(535)		
		⑮此テ、夫妻トシテ月日ヲ過スニ、染キ 事物ニ不似。(536)		
		⑯極テ染キ島ニテゾ有ナルトナン語り伝 ヘタルトヤ。(549)		
		⑰「道ノ程寒ク御マ斯拉ン」トテ、練色 ノ衣ノ綿厚ヲ、三ツ引重テ打覆タレバ、 染トイヘ云ハ愚也や。(572)		
		⑱此テ、五位、一月許有ニ、万ツ染キ事 無限。(574)		
		⑲御身一ツハ染クテ御マシナム。(5 301)		
		⑳亦、近江ニ知ケル所ヲモ、偏ニ我が領 ニシテゾ染クテ過ケル程ニ……(5 302)		
		㉑其ノ後ハ、蔵ノ物ヲモ取り仕ヒ、近江 ノ所ヲモ知テ、染シクテゾ有ケル。(5 303)		
		㉒家豊ニシテ、万ツ染クテ過ケル程ニ(5 303)		
合 計		46	18	15

用例出典：

- [1] 『古事記』1982 校注者：青木和夫ら 岩波書店
 [2] 『古語拾遺』1985 斎部広成撰；西宮一民校注 岩波書店
 [3] 『日本書紀』2003 校注者：坂本太郎ら 岩波書店
 [4] 『万葉集辞典』1994 尾崎暢殃ら 武蔵野書院

- [5] 『源氏物語』 1997 新日本古典文学大系 校注柳井滋ら 岩波書店
- [6] 『金葉和歌集』 1989 川村晃生ら校注 岩波書店
- [7] 『古今和歌集』 1989 小島憲之校注 岩波書店
- [8] 新日本古典文学大系 『方丈記』 1989 佐竹昭広校注 岩波書店
- [9] 龍谷大学本 『徒然草』 1997 秋本守英・木村雅則 勉誠社
- [10] 延慶本 『平家物語』 1990 北原保雄・小川栄一 勉誠社
- [11] 新日本古典文学大系 『今昔物語集』 一 1999 校注今野達 岩波書店
 『今昔物語集』 三 1993 校注池上洵一 岩波書店
 『今昔物語集』 五 1996 校注森正人 岩波書店
- 『今昔物語集』 二 1999 校注小峯和明 岩波書店
 『今昔物語集』 四 1994 校注小峯和明 岩波書店